

先日、平昌オリンピックのスケート女子500メートル競技で小平奈緒選手が金メダルを獲得しました。会場が大歓声につつまれたとき、彼女は口に指をあて「シーッ」と静粛をうながしました。次に滑る最大のライバル韓国代表のイ・サンファ選手のことを気づかってのことでした。



結果は小平選手が金メダル、イ選手が銀メダル。泣きくずれそうになるイ選手を抱きかかえ、小平選手はやさしく声をかけた。そして、お互いに国旗をかかえてリンクをゆっくりと回った。私は目頭が熱くなりました。

野生の動物は、自らの生存に必要な量のみを自然から奪取し、他はたとえ食料が目の前にあっても「むさぼる」ことをしないとされています。これは本能的に「むさぼる」ことによって食料がなくなることを知っているからと言えるかも知れませんが、いま現在の空腹が癒されれば、なお食を求める必要性がないという、単純な、ある意味での「おおらかさ」「ほどほどさ」「てーげー」を身につけているからであるような気がします。

学校では、機会ある毎に「自分の能力を最大限発揮するために頑張る、努力する」ことが必要であることを生徒たちに伝えていきます。しかし、私はそれが自らの利益を追求するためだけの「むさぼり」を要求していないかと、ちょっとジレンマを感じることもたまにあります。



同時に、自らの目標に向かって「頑張る」ことの必要性と、これと一見対立する「おおらかさ」の育成を両立させること(かなりの困難さを伴いますが)、この二つを成就させる以外にこれからの、先の見えない将来を安心して過ごすために避けて通ることはできないのではないかと考えています。

「おおらかさ」は努力の先に生ずる余裕です。努力不足の「てーげー、何もしない」こととは根本的に違うということもわからないといけないことです。成熟したライオンでさえも狩りの成功率は15%~25%であると言われるそうです。ライオンさんも必死の思いで努力して狩り、食後は余裕をみせるのです。

ある母親の娘が、頑張って受験をした大学の合格発表を見に行きました。残念ながら娘は不合格でした。娘は家に電話し、不合格であったことを母に告げました。母親は「あっ、そう」と言ったまま、電話口でしばらく黙り込んでいましたが、その後でケータイから聞こえてきた言葉は「あんた、帰りにトイレットペーパーを買ってきて」でした。その娘は後日「あの一言で、落ち込んでいた私の気持ちがどれだけ救われたことか」とつくづく述懐しています。

銀メダルのイ・サンファ選手はマスコミのインタビューに小平選手について「私が泣いている時、奈緒が近づいて慰めてくれた。その時、さらに涙が出た」とし「私がいたからこそ彼女がおり、彼女も私がいたからこそここまで一緒に来られたと思う」として「今回一緒に五輪の授賞台に並んで上がることができたのもとても良かった」と言及したそうです。

そう、必死で頑張った努力は報われようが目標を逃そうがその本質は変わらずに人を優しく強くさせるのだ。もうすぐ春を迎えるある日、そんなことを考えさせてくれた冬のオリンピックでした。

